メルとレザード

ムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メルとレザード

【Ｎコード】

Ｎ００４２Ｋ

【作者名】

ムー

【あらすじ】

メルとレザードの子供のコロのお話

コンコン、ガチャリ

「どうレザード、レポートは進んでる？」

レザードの家。レザードは魔術中学院出だされたレポートをしているところだった。

返事をするまもなく、彼女は入ってきた。

「・・・メル、あなたノックの意味を知っていますか？」

「うるさいわね。別に見られてまずいものなんてないでしょ。
一人エッチでもやってるなら話は別だけど」

笑っている。どうやら悪びれる様子はない。

「・・・下品ですよ。もう少し言動は考えたほうがいいですね。」

「うるさいわね。あんた何様？
で、どうなの？レポートのできは？共同でやらなきゃいけないんだから
できてないとかいったらぶっ飛ばすわよ。」

「今はじめたところなんですよ。このようなレベルのレポート、すぐにできます
ので
しばらく待っていてください。」

「あそ。なら適当にくつろいでるわよ。」

（・・・一回くらいこっちに顔向けなさいよねぇまったく。惚れてる身にもなりなさいよ）

レザードはメルを見ることなく、レポートを書き進めていた。
メルはため息をつきながらソファーに腰を下ろす。

（しかし汚い部屋ねぇ・・・）

レザードの部屋は相当汚かった。実験材料、実験道具、怪しげな紋章、食い終わった食器、漫画、資料・・・

（こいつ絶対B型ね。少しくらい掃除しなさいよ・・・って私も同じか。）

（ん？これは・・・）

メルは棚に保管されていたビンを手にとって見る。

（あの時の鳥の羽？）

空色の羽だった。ビンに大切に保管されているようだ。
他の物はほこりにまみれていたが、このビンの周りだけはきれいに片付いていた
。

（あいつ、ずっと持ってたんだ）

・　・　・

魔術小学院、４－４、第二時限目、紋章学基礎。

「ではこの紋章、わかるやついるか？・・・なんだ、誰もわからないのか？
　じゃあレザード、書いてくれ」

レザードは天才だった。物心ついたころから数々の書物を独学で勉強し、
小学院の授業で扱うものはとっくに習得していた。彼にとって授業は退屈そのもの。
黒板に淡々と答えを書いていく。

「正解だ。さすがだな。」

先生達のお気に入りだった。
寡黙だが成績優秀で、手のかからない生徒。
しかし、彼らは、彼がすでに自分よりも力が上なのに気づいていない。

（・・・生意気だよなあいつ。）
（な、むかつくよな。すましやがって。えらそうにしすぎなんだよ）
（でも、実際賢いし、力あるもんな。先生より絶対強いぜ）

（何とかして貶めたいよな。）
（ったく、あんなやつ死ねばいいのに）
（あはは、ほんとだ、死ねばいいのに）

性格のまっがた子供のグループはどこにでも必ずあるもので、このクラスも例外
ではなかった。
そしてこの時期の子供は、理性がうまく働かない。恐怖をあまり知らないのだ。

レザードは、嫌われ者だった。というか、自分からそうなることを望んでいた。
自分と同等のものなど周りにはいなかったのだから。小学院など親に言われたの
で仕方なく入ったに過ぎない。
その偉大な魔術師の親も、もう少しで力を上回ることができる。親を殺してとっ
と学院に飛び級し、自分の研究
に打ち込もうと考えていた。小学院で人として必要な感情を学んでほしいという
親の思いとはうらはらに。

「あんたら、そんなこと陰でこそこそ言ってて恥ずかしくないの？情けないわね
。
　あんたらみたいなの見てるとむかむかすんのよ」

しかし、メルだけは違っていた。彼女も天才であり、レザードとメルはお互い認
め合っている中であった。

彼女はその飾らない性格から（多少タカビーだが）、友達も多く慕われていたが
、やはり肩を並べれるのはレザードだけだった。

そんな生活を送っていた、ある休み時間。

「うわ、鳥だ鳥だ」

2羽の傷ついた小鳥が教室に入り込んできた。
片方は深青、片方は空色の鳥で、とてもきれいな羽をしていただろう。
しかし、今は血の赤がついている。
懸命に逃げてきたのだろう。教卓の上に落下していく。どちらもながくはもたないだろう。
しかし、それでもその2羽からは高貴なオーラが出ていた。彼らは美しかった。
彼等が大空を飛び回っているのを見れば、目を奪われてしまうのは間違いないだろう。

「うわ！？おい、あばれるなって」

駆けつけた先生が手当てを試みるも、深青の鳥がそれを拒む。
こいつら付き合ってるのか？どうやら
深青→彼氏
空色→彼女
らしく、深青が必死に空色を守っていた。

ぐいっ

「おい、レザード？」

先生を押しのけ、深青と向き合うレザード。

「あなた達は傷ついている。おとなしくするのです。」

クラスは静まり返った。あのレザードが心配している？信じられなかったようだ
。

事の成り行きを息を飲んで見守る。

強靭な意思を持つもの同士、わかりあうものがあるのか、目と目で語り合うレザ
ードと鳥。

鳥はおとなしくなった。

「キュアプラムス」

（おいおい、あのレザードが回復呪文使ってるよ）

（あぁ、しんじらんねぇ）

ざわめくクラスメートと先生。小学生ながら呪文を使ったことにではなく、やは
り手当てをしていることに

驚いているようだった。レザードは周りのどよめきを気にすることなく、丁寧に
血をふき取り、手当てしていく。

鳥は一命を取り留めた。まだ全快ではなく、飛ぶことはできないが。
「先生、この鳥はこのクラスでかうことにしましょう。動かすのは危険ですし、
私の手当てしか受けないでしょうから。」

レザードの献身的な介護で、鳥はどんどん元気になり、もう少しで羽ばたいてい
けるくらいにまでなったとき。

「・・・そうだ！いいこと思いついた！」
「なんだよいきなり」
「レザードをいじめる方法だよ！あいつあの鳥にご熱心じゃん？だから
　あいつら殺しちゃえばいいんだよー」
「な、なるほど！お前、頭いいなぁ。」
「へへへー、まかせなさーい」

ガキってのは恐ろしい。

その日の放課後。誰もいない教室で。

「あはは、よろめいてるよろめいてる」

悪がきたちが鳥かごを囲んでいる。シャーペンを柵の間から突き刺

し、
鳥を痛めつけていた。深青は傷つきながら必死に空色を守っていた。
「おもしれえ、がんばれーがんばれー」
ガキってのは本当に恐ろしい。
その行為はエスカレートし、ついに深青色の羽は真っ赤になった。

メルとレザードは胸騒ぎがして、教室へ走った。
そして・・・
深青は死んでいた。死んでなお、空色を守るように重なっている。
悪がきたちは走りこんできたレザード達に気づかないくらい興奮していた。
「やっほー、しんだしんだ」
「レザード、悔しがるだろうなぁ」

教室が真っ赤になった。悪がきたちは吹き飛んだ。空色は泣いていた。
「レザード・・・」
メルにはとめることができなかった。レザードは、悲しい瞳をしな

がら微笑んで
いた。神々しくすらあった。
その表情にどきどきしたメル。
・・・この状況でどきどきできる彼女はたいしたもんだ。

空色は奇跡的に助かった。深青の力により、空色が血に汚れることはなっかた。
教室は綺麗になっていた。魔法とは便利なものだ。
しかし、何が起きたか、誰が殺ったかは明確だった。だが、それをとがめれるもの、言及できるものはいなかった。

献身的な介護を続けるレザード。

「レザード・・・大丈夫？」

やはり悲しい瞳で微笑むレザード。

「私は大丈夫ですよ。それよりメル、包帯とってくれませんか？」

「・・・ん。あんた、なんであんなことした？何でそこまで献身的に介護するの？

自分のこと以外に興味のないあなたが」

「愚問ですね。私がこの鳥達を大好きだからですよ。あなたの言うとおり、私は
私に正直なんです。

はさみを取ってください」

「・・・ん。あんたってぜんぜんいい人じゃないわよね」

「はっはっは。何をいまさら。それにそれはあなたもでしょう？
あ、リバテープもらえます？」

「うるさいわねぇ。どうせ自分勝手よ私は。何で惚れちゃったんだろうねぇ？」

（あら、いっちゃったわ）

それを言ってしまったメルも、それを聞いたレザードも動じていない。

「そうなんですか？初耳ですね。さて、どこに惚れたんでしょうねぇ？
あ、綿棒とってください。」

「む、ぜんぜん動じないわね。って手も休めないし。
・・・ま、そんなもんよね。はい、綿棒。明日には元気に空を飛べるようになるはね。
おめでと、レザード。んじゃまた明日。」

（まったく、妬けるわね）

「えぇ、私はもうしばらく見守ることにします」

（おいおい、満面の笑みね。子供みたい。）

メルは笑う。ってお前ら小４じゃん。

次の日。

「おっはよー。おおお、元気になってるじゃん」

メルが教室に入ると、空色の鳥は元気に飛び回っていた。
その姿はやはり美しく、見るものを魅了した。それはメルも例外ではなかった。

「・・・綺麗」

鳥はレザードの周りをうれしそうに飛んだ。レザードもうれしそうだ。

（・・・妬けるわね）

そして・・・

「シャドーサーパント」

それは、闇の従者を召喚する呪文。

鳥は闇の従者を飲み込み、消えた。
舞い散る羽を残して。

唱えたのはレザード。

みな目を疑った。固まる空間。笑うレザード。

メルはレザードを蹴り飛ばした。机にしこたまぶつかるレザード。

「なんで!?なんでよ!!」

泣くメル。笑うレザード。

「昨日言ったでしょ、メル。大好きだからですよ。」

悲しい瞳で微笑むのだった。

メルは語る言葉を持たなかった。

ただただ、泣いた。

・・・

（・・・懐かしいわね。そういえばあのころからずっと好きなんだっけ
まったく、若いはねぇ私も）

・・・だからまだ中学生だって。

一とおり感傷に浸ったら、机に向かってるあいつにちょっかい出したくなったのか、

「ちょっと、まだできないの？頭悪くなったんじゃない？」

「な！？なんて失礼な！？いくらあなたでも許しませんよ」

（あ、やっと振り向いた。こんな言葉で腹立てるなんてまだまだ子供ねぇ）

だから、お前らまだ子ｒｙ

にしても、レザードはそんな言葉で腹を立てるようなやつではない。
メルの存在
はまんざらでもないようだ。

「手伝ってあげるわよ」

「いりませんよ。ちょ、やめなさい」

「なんで、いいじゃあん」

二人とも楽しそうだ。

（私も殺されたりするのかしら？それはごめんね。襲ってきたら殺り返してやるんだから）

なんだかよくわからない二人。レザードは少しずつより純粋になり、より狂った愛を持つようになる。

二人はくっつくことは無く、レザードはレナスを見つけ、メルは邪魔者として殺される。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0042k/

メルとレザード

2010年10月10日10時25分発行